

3: 日本のコレクター文化について、どのような課題を感じていますか？

私は、アートコレクションするという行為は、単なる物質的な所有欲とは全く違うものだと思っています。

先日、地方の大企業の会長とお話しする機会がありました。その方は財団を持ち、美術館まで運営されている、日本では非常に成功したコレクターと言える存在でした。

ただ、お話をしていく中で、世界最大級のアートフェアである Art Basel や、世界の戦後美術史に大きな影響を与えた「具体」について、ほとんどご存知なかったんです。

私はそこで、日本のアートシーンが抱えてきた本質的な問題を強く感じました。

日本ではこれまで、“自分の好きなものを集める”という意味での収集文化は育ってきました。しかし、世界の ART マーケットにおけるコレクションとは、単に作品を所有することではありません。

その作品が、世界のどの文脈に位置し、どの歴史と接続し、どんな価値観を更新していくのか——そこまで含めて共有する行為です。

つまり、コレクター自身が世界の文化史と接続している必要がある。

どれだけお金をかけても、世界の潮流や批評性、歴史認識と結びついていなければ、そのコレクションは閉じた地域性の中で完結してしまいます。

私は、日本にはコレクターは存在していても、“世界市場のプレイヤー”がまだ十分に育っていないのだと感じています。

ここでいうプレイヤーとは、単に高額な作品を購入する人ではありません。世界の美術史やマーケット、批評、制度と接続しながら、自らも価値形成に参加していく存在のことです。

日本には「所有」はあっても、「接続」がまだ弱い。私はそこに、日本のアート市場が長年抱えてきた課題があると思っています。

そして実は、これは特定の誰かの問題ではありません。むしろ、日本のアート教育や市場構造、百貨店文化、そして「値段を語ることを避ける価値観」が長年積み重なった結果でもあります。

だからこそ今必要なのは、「良い絵を飾る」ことではなく、世界と接続された ART を理解し、その価値形成に参加していくことなのだと思います。